Tokyo Shoukou Renmei NEWS

大臣に聞く（二面）

2023.7.1 NO.23

東京商工連盟ニュース

発行◎東京商工連盟　〒104-0061　東京都中央区銀座2丁目12番17号有楽橋ビル8階　TEL 03-3535-3425　FAX 03-3561-5523　発行日：2023年7月1日　第23号

連載 第十九回目

職人・中小企業・21世紀

新時代のメッキに挑戦する老舗企業

株式会社 池田車框製作所

大田区

慶応大学教授
植田浩史（うえだ ひろふみ）

一九三四年大森で創業した株式会社池田車框（しゃきょう）製作所（以下池田車框）は、現在大田区京浜島でバレルメッキを中心としたメッキ業を営む、従業員二十三名の会社だ。「車框」とは、創業者がボディ関係の自動車部品の仕事をしていたことからの造語で、世界で唯一の社名だろう。池田車框を率いるのは創業者のひ孫で四代目社長の池田絵理子氏（四十八歳）である。

大田区京浜島の本社外観

事業承継と経営環境

池田社長は、大学を卒業後大手企業に就職したが、新しいことを学びたく社会人大学院生としてMOT（Management of Technology）で経営学を学んだ。現在の京浜島に移転後の二〇〇八年、父親からの依頼で池田車框に入社。メッキや中小企業経営は素人だったが一から勉強し、二〇一〇年に社長に就任した。

メッキ業は、バブルの頃は全国に工場数約二千、四万人以上が働き、出荷額約六千億円だったが、二〇一九年には工場数約千と半減し、従業者数約三万人、出荷額も五千億円を下回った（四人以上、工業統計、電気めっき業）。メッキを必要とする仕事は、国内生産の伸び悩みで停滞気味だが、素材の多様化や高度化によってメッキへの要求が高まりビジネスチャンスは増えている。池田社長は、難しい経営環境に対し、社内の改革と社外への情報発信に果敢に、そしてたくましく立ち向かっている。

ロボット、コネクタ等の精密部品を加工

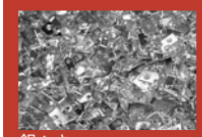
仕組みを変える

池田車框には、金、銀、銅、スズ、ニッケルの手動、自動ラインが並ぶ第一工場と自動車部品専用の全自動半光沢スズメッキラインの第二工場の二つの工場がある。メッキ工場の宿命として、扱う品物は形状、素材、加工内容、ロット数が多様であり、しかもランダムに注文が入り、短納期で対応しなければならない。池田車框の取引先は二百社を超え、登録されている受注品は二万にのぼる。

スズメッキ自動ライン

池田社長は、受注品の情報（素材、表面積、加工方法、価格など）と前処理、メッキ加工や検査の注意事項のデータ化を進めた。注意事項には同社のノウハウの蓄積が反映されている。データの蓄積は、見積を迅速化させ、同社への技術の信頼度を高めるとともに、最近の原材料費等の値上がりを反映した価格改定への理解にもつながっている。

金メッキ


銀メッキ

無電解ニッケルメッキ

社員の成長と新時代への対応

池田車框では、一級メッキ技能士四名など、社員の資格習得に熱心だ。メッキに求められる技術は変化し進化している。現場の社員自らが技術を向上させ、知識を増やすことがビジネスチャンスの獲得につながると池田社長は考え、コロナ禍で受験枠が制限されている中でも技能士を増やしてきた。最近、アルミメッキなどへの展開も考慮し、ドイツ製の新しいX線膜厚測定器を導入したが、そのきっかけは社員側の熱望だったという。

工場の責任者である滝ヶ崎早都治製造部長は「メッキはAIでは絶対できない」と語る。ITや自動化設備の利用は進んでいく一方で、多様化、高度化、複雑化が進むメッキで人間が関わる部分はより重要となっている。コロナ禍の影響、新しい設備や技術の導入など課題はあるものの、果敢に取り組む池田社長と社員の方々にエールを送りたい。

いつも前向きなメッキ技能士たち

（写真提供：池田車框製作所）